

ナホトカの半年の思い出

長野県 草野 克己

大正九年十一月八日 上伊那郡西春近村に生まれる。

昭和十年三月 西春近小学校高等科卒業。

昭和十二年三月 西春近青年学校卒業。

昭和十二年四月より西春近産業組合に奉職。

昭和十八年六月 召集により神奈川県相模原町の東部

第八十八部隊電信隊に入隊、教育を受ける。

同年十二月 関東軍に転属となり新京の関東軍特殊情

報隊の所屬となり、南嶺通信所において主としてソ

連軍の通信傍受の任務につく。

昭和二十年八月終戦、吉林省吉林において武装解除を受ける。しばらくしてソ連軍の指示により、どこへ行くとも知れず、ソ連兵警護の下三日間の行軍の末、着いた所はただ広々とした野原。そこには輸送用の貨物列車が止まっていた。二段に仕切られた貨車に日本

兵一千名を乗せ、行く先も分からず走り続けること十数日、着いた所はシベリアのアルタイスカヤと言つ所。ここで収容所に入れられる。長旅の疲れと空腹で身も心も疲れ果て夕食を待っている。やがて出てきた物は小さな馬鈴薯二個が入った岩塩のスープ、これがこの日の夕食である。その後も皮の付いた粟の粥に黒パンの小さな一切といった日々が続く。宿舎と言えば二段に仕切った板の床に毛布一枚に外套を掛けて寝る。夜中になればノミ、シラミ、南京虫が出て安眠すらできない有様。

作業は列車の製造工場で、無蓋貨車の製造作業。鉄工場で鉄板の切断、工作、塗装。また木工場で製材、出来た物を貨車に組み立てるといふ作業。屋外作業よりましと言っても、慣れぬ仕事に寒さのため手は凍え、作業は捗らない。文句を言われてもどう仕様もない。おまけに工場まで二、三十分の道程ときている。また、作業は昼夜三交代作業。時には夜中に石炭の荷降ろしなどの使役に駆り出される始末。食糧不足と労働に耐えきれず、栄養失調により無念の死を遂げる者が四百

人近く出る。残念ながらどうすることもできない。

収容所には風呂はなく、入浴には一時間くらいかかる所まで歩いて行かなくてはならず、体が弱く行けない人も多かった。それも二、三回行ったただけである。

二十一年後半ごろより食糧も若干は良くなってきた。そのころから「アクチブ」と呼ばれる連中が、民主教育と言って食堂などに壁新聞等を貼り宣伝したが、作業の疲れでそれどころではなかった。二十二年四月末になって突然、日本に帰すと言われ、列車に乗る。列車がバイカル湖にかかるころ、イルクーツクの街で大勢の労働者が赤旗を立て行進する姿が印象に残る。

五月十日ころ、ようやくナホトカに着く。いよいよ乗船かと思ったのも束の間、新青年連盟と名乗る連中が来て「お前たちは民主教育がなっていない、これから再教育だ」と言われ、第三ラージェルと呼ばれる所に入れられる。ここで五カ月近くも働かされるとは思わなかった。

ナホトカでの作業は港湾構築の作業であった。作業に出るときなど五列に並び出発しようとする、彼ら

はしっかりやって来いとはかり赤旗を振り、音楽で囃し立てる。私は事務長という立場で各隊の連絡、事務などの仕事に追われる。一日の作業を終えて帰って来た人たちの話を聞けば、港湾の石積み作業をしていると、日の丸を立てた引揚船が日本兵を乗せ出ていくのが見える。こんなとき、その船が地平線の彼方に消えるまで見送り、その先には日本があるんだと思うと故郷が偲ばれ、家族のことが頭に浮かび涙が頬を流れてしまったと聞かされ、思わず日本海を眺めずにはいられなかった。

こんなことが何回か続きシベリアにまた冬が近づいた九月二十六日、「遠州丸」と印された引揚船が入港、この船で帰国。二十七日に舞鶴港に入港、何があったのか三日間停泊の後、ようやく待ちに待った日本の土を踏むことができた。十月一日、懐かしい我が家に帰りついた。

昭和二十二年十月十日ごろ東京のGHQ本部より呼び出しがあり、何があったのかと前日東京へ立ち本部に行く、関東軍にいた当時、特殊情報隊にいた関係

で、ソ連軍の通信傍受について、発信場所、発信状況等についていろいろと聞かれただけで何事もなく、安心して帰った。長かった抑留生活にもこれで終止符を打った。

青春の一時期

岡山県 橋本 修一郎

昭和十八年九月、文科系の学生だった我々には徴兵延期がなくなり、学徒動員で十一月一日、姫路五十四部隊に入隊した。

初年兵を満州佳木斯一二四部隊で終え、新たにできた牡丹江の予備士官学校に十九年五月入隊し、年末まで八カ月の教育を受ける。

ここで、偶然岡山県商（現東高）の同級生草地君に再会する。彼はハルビン学院より学徒動員された。世の中狭いもので、中隊約二百人余の中、見習士官として遼陽の隊付になり、終戦まで二人は一中隊・二中隊

と分かれたものの、同じ部隊で行動を共にした。心強く感じたものだ。

終戦

二十年八月九日、ソ連参戦により駐留していた（承德）より東滿の戦線に参加すべく先行していた本隊を追って、兵約六十名と軍馬約二百頭が貨車で移動を始めた。途中、熱河省葉伯樹（ようはくじ）という駅で列車が止まって動かない。不審に思いながら朝を迎えた。夜が明け近所の民家を見ると、「青天白日旗」が軒並みに掲げられていたのに驚き終戦を知る。八月十六日だった。ここで部下の一軍曹が自決を謀ったが皆で止め、ことなきを得た。しかし、このときの皆の気持ちは、この軍曹と同じだった。

それと知った現地人の列車の機関手は、いつの間にか逃げていた。八方手を尽くして、やっと捜しだし、錦県へ到着したのは十七、八日ごろだった。当時の錦県の駅構内は無法地帯で、「パン、パン」と小銃・機銃の音が絶え間なく、治安は最低だった。構内で二、三日過ごしたが、その間に軍馬約二百頭の飼育が不可